

公武の力関係を劇的に変えた 承久の乱

横浜歴史研究会
上野隆千（たかゆき）

平成7年10月4日

126代に及ぶ歴代天皇のなかで、自ら挙兵し武士団と戦った特異な人物が二人いる

96代後醍醐天皇



鎌倉幕府を倒し建武の新政
を実施（2年で崩壊）

82代後鳥羽天皇（上皇）



承久の乱にて鎌倉幕府に敗れ
隠岐の島に配流される

承久の乱で歴史が変わった

- ①鎌倉幕府の支配が東国から全国へと広がる
 - ・かつて5年間の源平合戦で得た平家所領は約**500ヶ所**
 - ・わずか30日間の承久の乱で得た西国の京都与党の所領は約**3,000ヶ所**
 - ・**52国のうち26→38国が鎌倉幕府支配下になる**
- ②朝廷の皇位継承に関与する
 - ・後鳥羽、土御門、順徳の三上皇は配流される
 - 幕府は仲恭天皇を廃し後堀川天皇を即位させる。
- ③これ以降日本の政治の主導権は後醍醐天皇の建武の新政の一時期を除き、江戸幕府が滅ぶまで700年近く武家が握ることになる

朝廷と幕府の基本的関係

- ①武家政権側から見れば、最高権威の朝廷から与えられた将軍職という地位により、周りから崇められながら実質的に国を支配
- ②朝廷側から見れば、軍事力を持つ武家政権に将軍職を与えることで朝廷が守られる暗黙の関係

朝廷が名目上のトップ、幕府が実際の支配者という基本的関係は武家政権の誕生した鎌倉時代以降も続く

鎌倉幕府と後鳥羽朝廷

後鳥羽の異母兄・安徳天皇を結果的に追いやった
朝敵とも言うべき鎌倉幕府は、朝廷との関係に苦心

- ① 初代・頼朝は東大寺再建に協力し、自分の娘を後鳥羽の
后にしようとした（入内工作）
- ② 2代・頼家は蹴鞠を通じ、蹴鞠の師匠を鎌倉に派遣する
よう申し入れた
- ③ 3代・実朝は和歌で近づき、後鳥羽の皇子下向を望んだ

源氏三代の姿勢は「後鳥羽にどう近づくか」であり、
主導権は朝廷側にあったと言える

多彩な文武両道の後鳥羽上皇



- ① 壇ノ浦で入水した安徳天皇の異母弟で後白河法皇の孫
 - ② 九条兼実失脚後、摂関家を押さえ18歳で土御門天皇（4歳）に譲位し、以降1221年まで3代23年に亘り上皇として院政を敷いた（**治天の君として君臨**）
 - ③ 新古今和歌集の下命者であり、撰者のひとり
「**ほのぼのと 春こそ空に 来にけらし 天の香具山 霞たなびく**」
 - ・ 28回の熊野詣でも歌会 後の配流後も和歌を続ける
 - ④ 蹴鞠の達人で鞠の家から「長者」の称号
 - ⑤ 相撲・水練・弓にも長けていた（慈光寺本・承久記）
 - ⑥ 白河上皇時代の北面の武士に加え西面の武士を組織化
- ※ 菊の紋章を好み、以降皇室の象徴として定着

和歌を通じた後鳥羽と実朝の蜜月関係

- ①元服した実朝（幼名は千幡）の名付け親は後鳥羽
- ②実朝の妻は後鳥羽の伯父である近臣坊門信清の娘
 - ・別の娘は後鳥羽の妻のひとりであり、後鳥羽と実朝はいわば義理の兄弟
- ③実朝は後鳥羽から藤原定家の通じ和歌の指導を受け、金槐和歌集をまとめる
最後の一首で実朝は後鳥羽に忠誠を誓う歌を記す
山はさけ 海はあせなむ 世なりとも 君にふた心 わがあらめやも
- ④実子がない実朝に後鳥羽の子を迎える内諾を得る
- ⑤1218年12月、後鳥羽は実朝を右大臣に任命する
(毎年のように位を上げ頼朝を凌ぐ異例の出世)

三代将軍・実朝の暗殺（黒幕はいたか？）

建保7年（1219）1月27日、八幡宮での
実朝右大臣拝賀の儀で甥の公暁により
暗殺される



①北条義時黒幕説

- ・体調不良で現場に居合わせず難を逃れた（吾妻鑑）

→ 実朝に中門に留まれと言われ参列出来なかった（愚管抄）

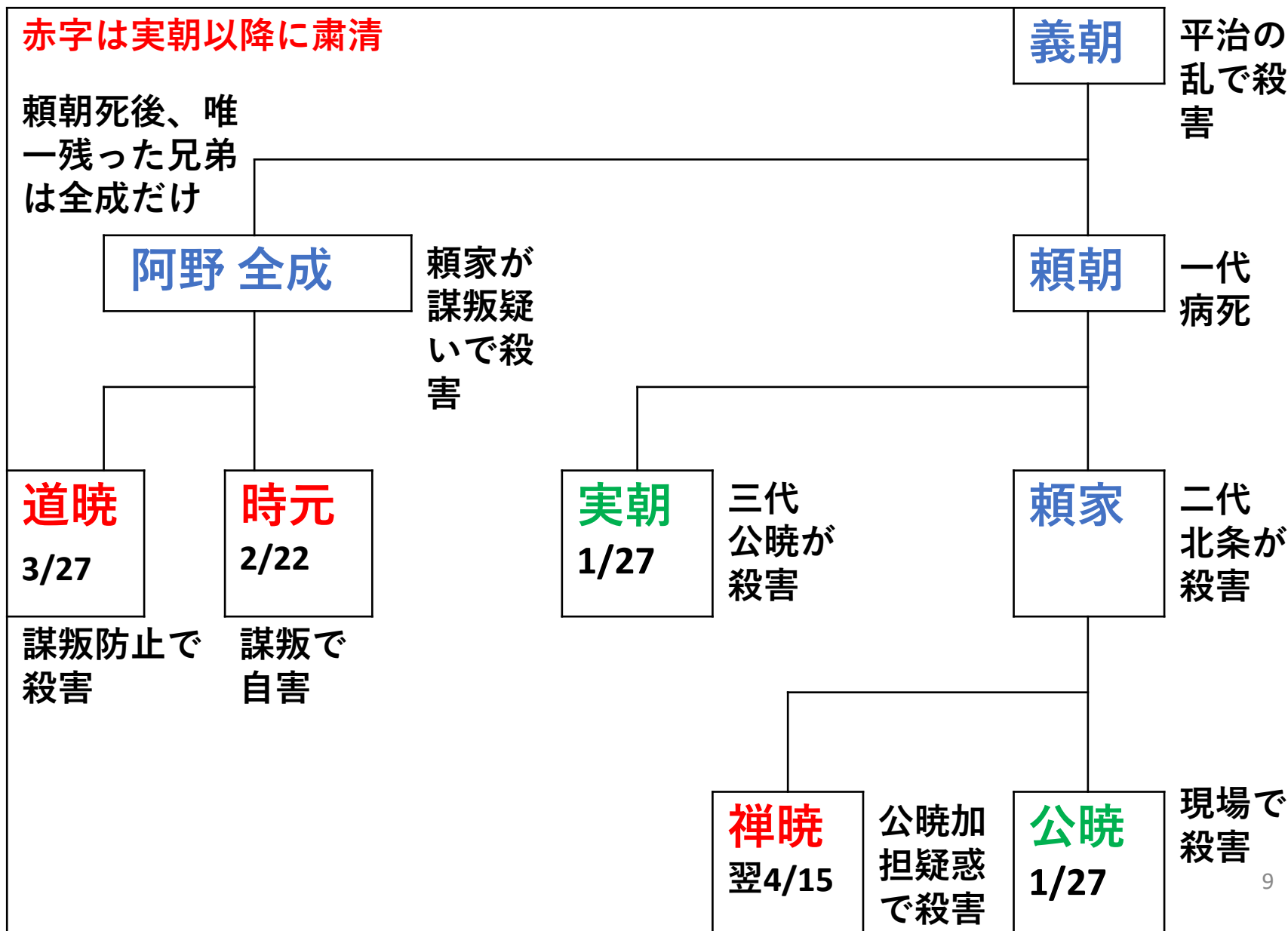
②三浦義村黒幕説（永井路子説）

- ・義村は公暁の乳母夫であり、この日に限っていなかった

→ 前年の直衣始の儀で不祥事がありこの日は外されていた

親（頼家）の敵と次期将軍を狙った公暁が、八幡宮別当
という地の利を生かし単独で実行した考えるのが妥当

実朝暗殺後 後継をめぐり 源氏の粛清が続く



硬直化する後鳥羽の対応

- ① 前年に快諾していたはずの親王下向を院が事実上撤回
- ② 弔問使・藤原忠綱が義時邸で院の寵愛・亀菊に与えた摂津国長江・倉橋の2荘園の地頭改補の院宣を伝達。



北条時房が千騎の軍勢を引き連れ①の親王下向の早期実施催促 ②の地頭改補拒否と強硬策に出る

※吾妻鏡では政子演説でも分かるように「荘園問題」が強調されている。また教科書でも承久の乱主要因として取り上げられている。

しかし、これは義時に対する瀬踏みではないか？

実朝執政時にも院からは荘園に対する地頭改補要求は再三あり、実朝は幕府と院の板挟みの中で対応していた。

即ち、義時も同じようにコントロールできるかを試した

王家の象徴である内裏の焼失 承久元年7/13

三寅(後の頼経)が鎌倉に將軍として下向した直後に、源頼茂（摂津源氏の名門で頼政の孫）將軍職を狙い謀叛



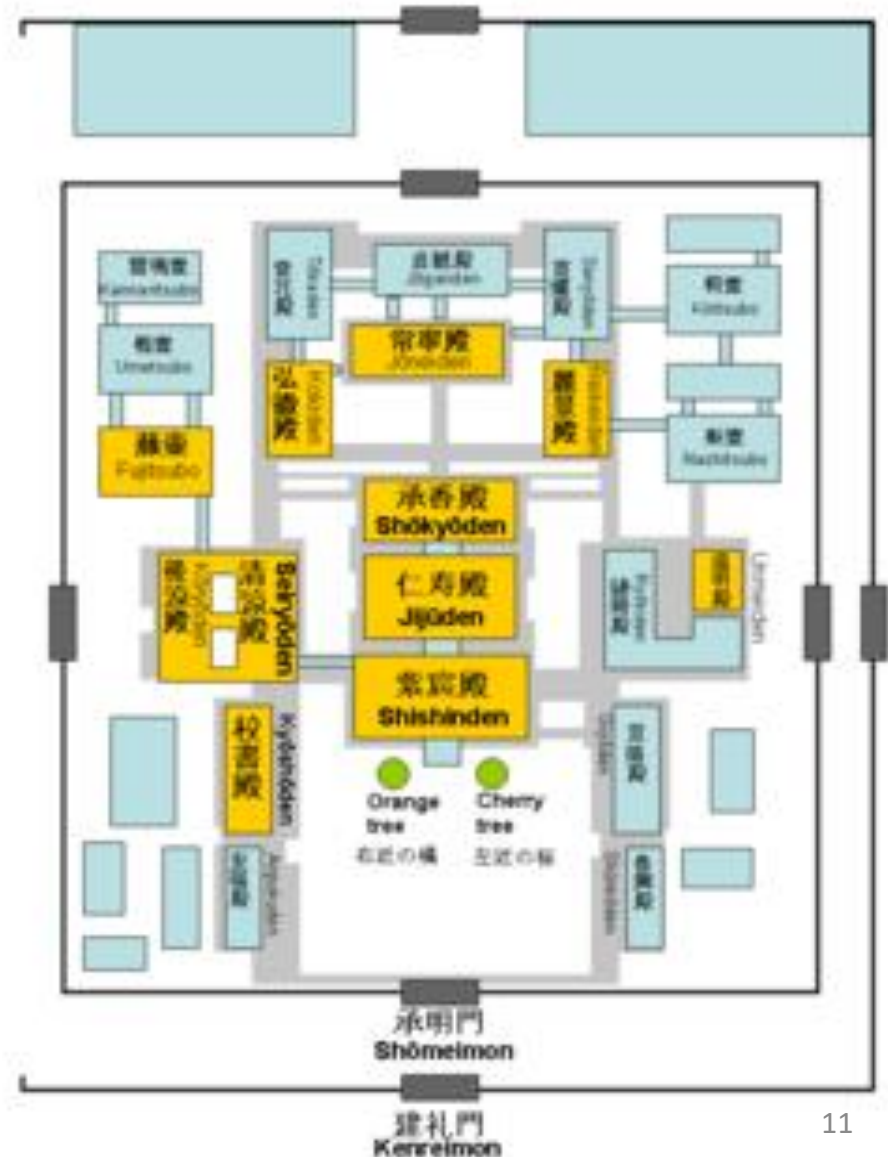
合戦後頼茂は仁寿殿に立て籠り、火をかけて自害



これにより、内裏の主要施設と宝物は焼失

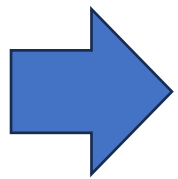


ショックで後鳥羽院は一か月寝込む



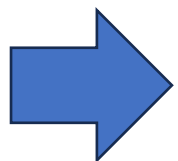
後鳥羽院の怒りと自信

- ① 鎌倉幕府内の将軍地位をめぐる権力闘争で、内裏が焼失した内裏再建には膨大な費用が必要。しかし荘園からの費用徴収に地頭は非協力的であった。



謀叛を招いた義時の統治力、内裏再建非協力
に対する後鳥羽院の不信と怒り

- ② 将軍就任予定の三寅を阻止する謀叛を感知した在京御家人が後鳥羽に訴え、これに応じた後鳥羽が追討の院宣を発し軍事行動を起こしたが、この間、鎌倉幕府は全く関与していない



鎌倉とは関係なく、御家人を動かせると後鳥羽
は自信を持ったとしても不思議ではない

ついに承久の乱の勃発

承久 2 年5月15

後鳥羽院が五機内諸国に「北条義時追討の院宣」を下すと同時に親幕府派の西園寺公経親子を幽閉

- ①京都守護・伊賀光季（義時・後妻の弟）が院の命を受けた三浦胤義・佐々木広綱らによって討たれる
- ②在京経験のある武田信光・小笠原長清・小山朝政・宇都宮頼綱・長沼宗政・足利義氏・北条時房・三浦義村など有力御家人にも義時追討の院宣が下される。

追討使の記載なく、いわゆる内乱による義時排除を狙ったもので、あくまでも倒幕でなく義時排除による幕府改編が目的である。

※更に北条氏を排除し、三浦氏（義村）に替えたかったのか？

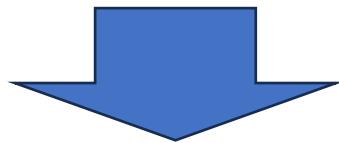
迅速な鎌倉幕府の対応

- ①伊賀光季の家臣、西園寺公経家臣から鎌倉へ急報
- ②三浦義村は弟の胤義の使者を追い返し義時に知らせる
- ③院から鎌倉御家人への密使「押松」の捕縛と院宣回収



尼将軍・政子の御家人に対する演説の巧みさ (5/19)

- | | | |
|------------|--|----------------------------|
| ①頼朝以来の恩を持て | | 義時追討でなく倒幕の危機 |
| ②寵愛亀菊荘園が原因 | | 院の動機の矮小化 |
| ③胤義・秀康を討て | | 逆臣の懺で宣旨が出た
院が対象では御家人尻ごむ |



大江広元らの注進により、動揺する御家人からの離反を防ぐため**迎撃**でなく**急ぎ出撃**を選択する

敏速な動きで幕府軍の圧勝

大將軍一人は急ぎ先発との宿老・三善康信、大江広元の進言で急ぎ出陣決定

①5月22日幕府軍出兵（途中で多くの御家人が加わる）

- | | | | |
|--------------|--------|---|-----------|
| ・北陸道軍（北条朝時） | 4万（？） |  | 迎える京方 |
| ・東山道軍（武田信光） | 5万（？） | | はわずか2万（？） |
| ・東海道軍（泰時・時房） | 10万（？） | | |

※吾妻鏡に記す軍の規模は甚だ疑問、実際は何分の一ぐらいか

②6月14日幕府軍、京方防衛ライン宇治川を突破

- ・京方総大将藤原秀康・三浦胤義敗死、大江親広は行方不明



幕府軍入京

主な参考文献

- 承久の乱 坂井孝一 中央新書
- 吾妻鏡 藪本勝治 中央新書
- 鎌倉幕府と朝廷 近藤成一 岩波新書
- 院政と平氏・鎌倉政権 中央公論新社
上横手雅敬・元木秦雄・勝山清次
- 鎌倉北条氏の興亡 奥富敬之 吉川弘文館
- 鎌倉将軍・執権連署列伝 細川重男 吉川弘文館
- 鎌倉殿 あれこれ 長尾正和 神奈川歴研発表資料